秋田博研報　6号　71～76ページ　1981年3月

博物館教室「〝象潟〟をさぐる」について

―望ましい博物館教室のあり方をもとめて―

笹岡昭平・半田和彦・渡部晟

Ⅰ　はじめに

秋田県立博物館では、教育普及活動の一環として、年10数回の博物館教室（以下教室と省略する）を実施してきている。その基本的意義等については、すでにのべられており[1]、化石採集会をとりあげた詳細な事例報告もなされている[2]。本稿では、昭和55年5月25日に秋田県由利郡象潟町において実施された「〝象潟〟をさぐる」について、この教室を実施することになった経緯やその実際、反省等についてのべてみたい。

〝象潟〟は、その存在当時、風光明媚なところとして知られ、松尾芭蕉をはじめ多くの文人・墨客が訪れた。しかし、文化元年（1804）6月4日夜半の象潟大地震によって約2m隆起し、陸化、消滅したことであまりにも有名である。この教室では、これらの事実に注目し、地震の前後における自然の変貌と人間のうごきをテーマにした。このテーマの前提となったのは昭和53・54年度の2か年にわたり当館の全部門（7部門）が参加して実施した鳥海山麓地域研究である。その成果の一部は『秋田県立博物館研究報告』第4号・第5号、そして本号などに論文及び報告として公表されているし、昭和55年1月から6月までのテーマ展「鳥海山麓―山と人―」で展示・公開されている。この教室は、地域研究の成果を従来までの方式である論文や展示で表現するに止めず、更に現地においてフィールドワークを通して県民に還元しようとした試みである。また、本教室は従来実施してきた数多くの教室と比較してきわだった特徴をもっており、筆者らが描く、望ましい博物館教室のひとつの典型的な例になると考えている。この点からこの教室をとりあげて報告しようとするものである。

Ⅱ　「〝象潟〟をさぐる」の実施理念

ここでは、「〝象潟〟をさぐる」が従来実施されてきた教室と比較した場合、いかなる点で特徴的であるかについてのべることとする。なお、この特徴は、特徴であると同時に、教室の実施担当者が教室の発案時点から終了時まで持ち続けた理念でもあった。

1．本格的な研究成果の普及

これまでの博物館活動を概観すると、調査・研究が行なわれ、その成果は何らかの形で公表され、普及されてきたが、その普及の手段として教室を利用した例は極めて少ないのが現状である。先の「化石採集会」の場合においても、研究成果の普及を主目的とするよりは、夏休み中の児童・生徒に対するサービスという色彩が濃いものであり、このような色彩を持った教室が大勢を占めているのが昨今の現状と思える。もちろん、これらの教室にも、それなりの存在意義のあることについては諸人の認めるところである。

しかるに、当博の地域研究はこれまで3年サイクルで県内の特定一地域をとりあげて行なうもので、当館の全部門が総力をあげてとり組んできた（第1回「鹿角地域」、第2回「鳥海山麓地域」。したがって、その都度多くの成果が得られてきた。今回の教室「〝象潟〟をさぐる」では、本格的な調査・研究（鳥海山麓地域）によって得られたオリジナルな成果が、はじめて教室という形態をとり普及されたのである。

2．地元への還元

地域研究においては、特に地元の協力を受けることが多く、またそれなくしては地域研究は成立しないと言っても過言ではない。地域の人びとの協力を得て研究が進むのであるから、おのずとその成果を地元に還元する方向で十分に配慮しなければならない。館において地域研究の成果を展示・公開しても一般には対象地域が遠隔地である場合、地元の人々の来館には限りがあり、地元での移動展のようなものが必要とされる。以上のような考えに立脚し、教室を手段とした普及の

場を地元においてもったのが本教室なのである。

3．総合化された内容の教室

当館は自然系2部門、人文系5部門の総合博物館である。当館の設立構想[3]において「諸学の寄せ集め的総合博物館ではなく、秋田郷土を自然史的、人間史的に綜合した、郷土学的綜合博物館であるべき」と強調されている。「〝象潟〟をさぐる」でテーマとした「象潟地震前後における自然の変貌と人間のうごき」はあきらかに歴史、生物、地質の3部門が並列するのではなく、当館のめざす総(綜)合的な立場にたって追求できる、そしてしなければならない内容であった。このような総(綜)合的なテーマを正面にすえた教室は従来行なわれたことがなかったのである。

Ⅲ　実施までの経過

1．発案の段階

この教室が発案されたのは、昭和54年の秋で、教育普及担当が次年度事業計画案の作成中にであった。この時点では、鳥海山麓地域研究は、ほぼ調査・研究の段階を終え、目前にせまった展示の具体的準備にとりくんでいた。参考までに、歴史、生物、地質の各部門の研究項目をのべると次のようなものである。

歴史……象潟地震の被害、陸化した土地の開田と覚林の反対運動、山岳信仰（特に修験）

生物……旧象潟と海岸性植物「オニヤブソテツ」について、弁天島の植生の特徴、鳥海山北麓の鱗翅類

地質……象潟泥流について、〝象潟〟にすんでいた貝の化石、〝象潟〟の湖岸線の地形

この教室の発案者は、上記の研究成果を部分的にとり出して組み合せることにより、非常に充実した内容をもつ教室ができそうだと考え提案したのである。もちろん、前述したように本教室の理念はすでにこの段階で意識され、提案の中に条件として含まれていた。ただちに実施の可能性について3部門の担当者による打ち合わせが行なわれ、十分可能であるとの判断が示された。これを受けて教育普及担当は次年度事業計画の中に、本教室を正式に組み込んだわけである。

2．具体化の段階

その後、教室の内容決定から実施まで、3名の部門担当者（筆者ら）が推進することになった。筆者らは前述したところの理念を生かすために、次の2点（a．b）を骨子とした教室にすることに決定した。

a.フィールドワークを主体とすること。

b.内容は象潟地震に関連したものとすること。

そのうえで、フィールドワークにおいて見学する個所をそれぞれの部門で設定し、お互いにそれを検討しあうために、昭和55年3月中旬に第1回の現地調査をこころみた。この調査結果にもとづいて見学地点とコースを内定した。

3．実施準備の段階

3月中には、実施期日も決定された。4月上旬、筆者らは第2回目の現地調査を行い、内定したコースをそのとおり歩いてみて、見学地点と学習内容の確認、所要時間の計測等を行い、正式にコース、見学地点が決定された。これをうけて博物館教室担当者によって実施要項や依頼状等が起案され、関係各所に配布された。その後、5月上旬までの間に、筆者らは各自それぞれ1～2回教室実施のための補充調査を行った。5月中旬には案内書（手書き）の作成にとりかかり、実施3日前に完成した（参加者名簿を含み19ページ）。実施の前日、筆者らは第3回目の現地調査を行い、最終的にコース全体を総点検した。

Ⅳ　教室の実際

教室の当日、昭和55年5月25日（日）は天候に恵まれた。ここでは実際の教室がどのように行われたかをのべる。

1．当日の日程

第1図にコースと見学地点を示したので、ここでは当日の日程を示すこととする。

9：30～10：00　象潟町公民館で開講式と概要説明、バスで移動

10：05～10：10　①地点　四丁目塩越　バスの中から観察　バスで移動

10：15～10：25　②地点　三丁目塩越　徒歩で旧浜堤をこえる。バスで移動

10：30～11：00　③地点　汐越城跡と中橋付近　徒歩

11：10～11：20　④地点　蕉風荘前　バスで移動

11：30～12：10　⑤地点　蚶満寺本堂

12:10～13:00　昼食、休憩

バスで移動

13:15～13:25　⑥地点　上たらの木森

徒歩

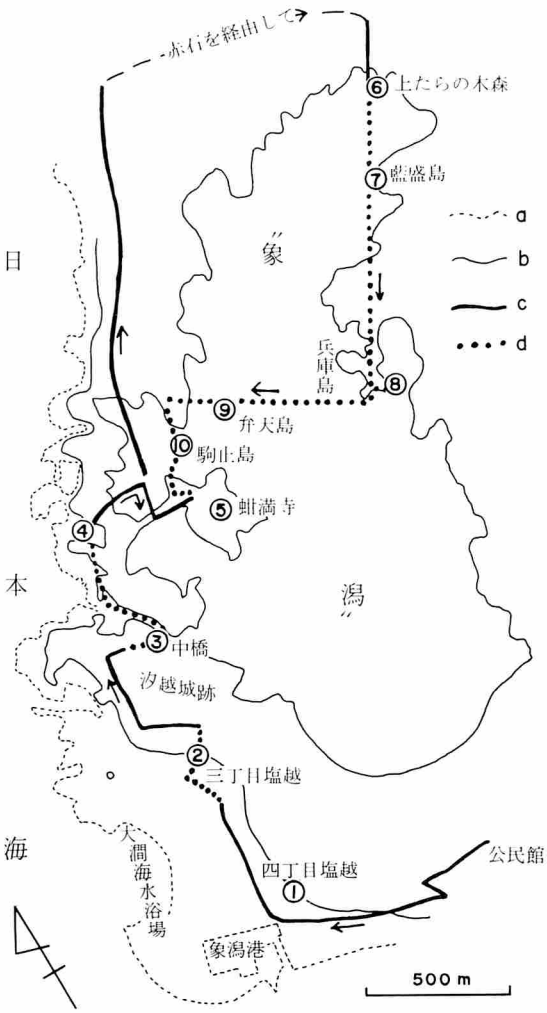
13:35～13:40　⑦地点　藍盛島

徒歩

13:50～14:10　⑧地点　兵庫島

徒歩

14:20～14:40　⑨地点　弁天島



第１図　コースと観察地点

a：現在の海岸線　b：隆起直前の海岸線および湖岸線

c：バス利用区間　d：徒歩の区間

①―⑩：観察地点

徒歩

14:50～15:00　⑩地点　駒止島

徒歩

15:15～15:30　蚶満寺山門前で閉講式、解散

２．観察地点と学習内容

①地点　四丁目塩越

この付近には、文化元年の地震前に形成された浜堤が発達している。浜堤のすそは隆起前の海岸線と考えられ、かなり急な小崖として連続しており、一部は石垣となっている。この付近の浜堤の上は地震前に問屋があったところで蔵がならんでいたと伝えられる。現在、当時の蔵が一棟残っている。

②地点　三丁目塩越

四丁目塩越で観察した海岸線の地形は北方によく連続している。しかし、この付近では南方と異り、旧海岸線の前面にもうひとつの浜堤が形成されている。新旧二つの浜堤の間は非常に平担で標高は２ｍ強である。

③地点　汐越城跡から中橋付近

元和９年（1623）に作られた大名仁賀保氏１万石の居城であったが、寛永８年（1631）廃城となり、その後本荘藩の塩越町奉行所がおかれ、奉行所が中心となり〝象潟〟の景観の保護と維持につとめた。中橋（なかのはし）は潟が日本海とむすばれている唯一の場所にかかっており、当時の人びとが舟で名所めぐりをする際、この橋のたもとで下船し、徒歩で蚶満寺に参詣したと伝えられている。以上のように汐越城跡から中橋付近は〝象潟〟存在期における観光行政の中心地であり、観光の基点でもあった。

④地点　蕉風荘前（写真１）

入江が堤防の構築によって外海と隔てられてできた波静かな池がここにあり、ホソウミニナ、ウミニナ、マガキなど〝象潟〟にもすんでいた内湾性の貝がすんでいる。〝象潟〟には、イボウミニナが多量にすんでいたことが化石から知られており、その岸辺はこの池の岸辺にホソウミニナが群生しているのと同じようなありさまであったろうと考えられる。

⑤地点　蚶満寺本堂

〝象潟〟存在時、潟内の島々の管理を藩より命じられていたのが蚶満寺（曹洞宗）であった。地震で陸化した後、藩は財政難のおり、この地の開田を計画した（文化３－1806）。この方針に対し、名勝地象潟の保

写真1　蕉風荘前の池の岸辺に群生しているホソウミニナ

写直2　蚶満寺の山門前で説明を聴く

護のため京都閑院宮家の伝統的権威を背景に島々を切り崩す開田に反対したのが当寺24世覚林であった。彼の反対運動を藩と宮家との往復書簡を通し、はじめて明らかにすることができた。覚林は捕えられ文政5（1822）獄死したが、島々は切り崩されることなく現在に残った。

⑥地点　上たらの木林

オニヤブソテツは暖地海岸の崖などに自主する常緑強壮な多年生草本（オシダ科）である。かつては旧象潟の島々にたくさん自生していたと想像されるが、現在は海岸に近いところだけに分布している。上たらの木森は旧潟の東北端にあり、現海岸線から1km余の距離にある。この付近の島や旧潟岸にはオニヤブソテツが見あたらないのに、ここだけにたった1株のオニヤブソテツが自生しているのはふしぎなことで、その意味するところを推定した。

現在、九十九島が点在する田園が昔は潟であったことを証明する一端として、特に旧東岸にオニヤブソテツの存在を求めたのだが、東岸ではここだけである。

⑦地点　藍盛島（写真3）

上たらの木森のあたりから南へ向って高さ数10cmから1m程度の小崖が2kmほど南の続島付近まで続いている。この小崖は〝象潟〟の湖岸（東岸）と考えられている。この地点では、この小崖の部分に「舟つなぎ石」が見られる。これは泥流堆積物中の大きな岩塊に舟のとも綱をかける溝がきざんであり、この地の所有者は先祖から「舟つなぎ石」であることを聞かされているとの事。この崖に、このような石のあることは、

写真3　舟つなぎ石を観察する

この崖が湖岸であったことを示している。

⑧地点　兵庫島付近（写真4）

〝象潟〟の湖底であったところは、注意してみると

写真4　貝化石を調べる(象潟町 横山正義氏撮影)

いたるところに堆積物中に含まれている貝化石が掘り上げられている。ここでは、先年水路の改修が行われたおりに、多量の貝殻が掘り上げられ、地表に散乱しており、また水路の底にも散乱している。これらは、いずれも内湾の泥底にすむ貝であり、現在秋田県にはすんでいない貝もある。これらの貝によって、〝象潟〟の環境等が推定される。

⑨地点　弁天島

オニヤブソテツの自生する丘や崖をいくつか比較すると、だいたい東～北斜面に多く、やぶの中から顔をのぞかせている。ここでもヤブツバキの林縁に多数みられる。弁天島の北東側ではヤブツバキ、ネム、タブノキ、オモト、オニヤブソテツなどの暖地海岸性の植物が多いのに対し、南西側ではエゾイタヤ、ハリギリ、シナノキなどの比較的北方系のものが多い。この原因は大きな課題である。

⑩地点　駒止島

潟の中などに見られる小丘（島）はすべて泥流丘であり、鳥海山の大爆発によって生じた火山泥流によって形成されたものである。泥流は、山体が崩壊した物質であるから大小の岩塊を主体としている。ここでは長さと幅が5m、厚さが3mほどの巨大な岩塊が露出しており、泥流流下のすざまじさをしのぶことができる。

3．参加者

参加申込み受付けの段階で、申込み者数は57名であった。定員は貸切バスを使用すること、街路や水田の中の狭い道を歩くことなどを考慮し、一応50名としていたが、一部の人びとに乗用車を利用していただくことなどを条件とし、定員以上の申込みをうけつけた。

しかし、当日までにこの内から14名の欠席の連絡があり、当日になってからの参加申込みが11名あったので、結局参加者は54名になった。この内訳を地域別にみると、象潟町38名、秋田市11名、本荘市2名、金浦町2名、県外1名である。参加者を年齢によってみると50～70歳代が多く、平均年齢は55歳程度と推定される。なお、館からは学芸主事笹岡昭平（生物担当）、同半田和彦（歴史担当）、同渡部晟（地質担当）、解説員辻由紀子の4名で、笹岡、半田、渡部は解説および案内等を辻は救護を担当した。

4．参加者の反応

当日の参加者の反応は、当然のことながら個人個人によってそれぞれ異なり、それをすべてにわたって述べることは不可能である。ただ筆者らは、地元からの参加者と地元以外からの参加者の間にみられた大きな反応の相異に気がついたので特にこの点にしぼってとりあげることにする。

地元の多くの人びとにとっては、地下に存在している貝、オニヤブソテツ、湖岸線を示す小崖の存在、町の中にある浜堤等個々の事実は周知のことである。しかしこれらの事実は、互いに無関係なものとしてとらえられていたのである。それがコースを進んでいくうちに関連づけられテーマの中できちんと位置づけられながら登場してくるので、そのたびにうなずいたり、感嘆の声がもれたりしていた。結局、これらの諸事実をさまざまな学問分野から「地震によって陸化した〝象潟〟」という視点で統一的に説明をうけたので、総合化された知識として身についたとの感想をもった参加者が多かったようである。

一方、地元以外の参加者の場合には、〝象潟〟については漠然とした知識しかなかったため、見るもの、聞くものすべてが新鮮な事実であったようである。特に舟つなぎ石、地下の貝、覚林の活動等について大きな関心を示していた。一日の行動を終えた後、都市における伝統の少なさ、地方の良さ（昔の人びとの生き方が文化財として残り、歴史が身のまわりに常にあるという点での）を実感として持ったとの感想をのべた参加者（秋田市）があり、また幾度か観光のためこの地を訪れたことがあったが、総合化された説明を受けこれまでの知識が表面上のものであったことを知ったという感想をのべた参加者もあった。

V　反省点

筆者らは、観察地点を選択するにあたって常にこの教室のテーマを意識していた。したがってテーマにそわなければ、たとえコースの途中にあり豊かな内容を含んでいる場所であっても計画の段階で切り捨てられたのである（たとえば、荒川決死隊祈願所として有名な熊野神社や蚶満寺境内の名所地などがある）。

このようにして実施された教室の内容に対して、参加者からはまとまりがあったとの声があった。しかし一方ではこのような企画を同町の他地域でも実施して

ほしいとの声や、筆者らが意識して切り捨てたところをとりあげてほしかったとの声もあり、筆者らの意図したテーマが、すべての参加者に完全に理解されていたわけではないことを確認した。この教室はいわゆる名所めぐりではもちろんなく、広く浅く各分野が連合し、同一地域内の事象をとりあげてうまく構成したものでもない。各観察地点がテーマにそって有機的に緊密に結ばれているのである。このようなことを認識してもらう努力が不足ではなかったかと深く反省している。

なお、筆者らはバスの件、各地点の移動に費やす時間の件を無視した場合、望ましい観察地点の順を次のように考えていた。

1.観察地点⑧兵庫島

ここで、地下貝を実際に休耕田の地下から掘り出してみる。何故、このような地下貝があるのかの疑問を参加者にもってもらう。昔、潟であったことを確認する。

2.観察地点⑦藍盛島

潟であったとすれば、どこまでが潟なのかの理解として、湖岸線を確認し、舟つなぎ石を通し当時の人びとの生活を示す。

3.観察地点⑥上たらの木森　⑨弁天島

両地点を通し潟内に島々が点散することと、島の植物を通し当時の象潟の自然を考える。

4.観察地点⑩駒止島

これらの島々は、どのようにして形成されたのかを考え、鳥海山の噴火で形成された泥流丘であることを確認する。

5.観察地点④蕉風荘　①四丁目塩越　②三丁目塩越

潟内の様子を蕉風荘の貝の棲息状況から理解してもらい、その後①、②で昔の日本海との境目となる海岸線の場所を確認する。

6.観察地点③汐越城跡、中橋付近

潟と海とは中橋の所で唯一結ばれていたことを理解し、当時の観光行政を確認する。

7.観察地点⑤蚶満寺

今まで見てきたような潟が地震で隆起することにより陸化し、その後を開田しようとした権力と戦った覚林を示し、自然保護の先覚者を理解し、今後とも我々は美しい文化遺産の保護につとめる意識を確認する。

Ⅵ　望ましい「教室」のあり方

当館を含め、各地の博物館等において企画される教室（名称的には多様であるが）を、実施する立場から大別すると、およそ次の３つに大別されよう。

1）主催者側的立場のもの

いわゆる、外部からの講師・指導者・実演者の招へいや見学会的なもの

2）主体的ではあるが、特別企画的なもの

学芸員自らが活動する中で行われるもので、それぞれの専門性が生かされ、充実した企画が組まれることが多いが、館側からすれば教室実施のために特別な研究と労力を費やす場合が多いもの

3）博物館の日常業務の中から生まれるもの

学芸員の館における日常業務である調査から研究が行われ、それが展示として表現され、さらに教室として普及されるもの。このような一本の流れの中で行われるもので、本教室はこれに該当する。

1)の形式は、われわれを企画家にしてしまうおそれがあり、あまり教室としては理想的形態ではないと考えられる。2)の形式が現在、教室の大部分を占めるものと思われるが、教室を実施せんがための調査・研究となりがちで、われわれの仕事を単発的にするおそれがあると考えられる。

以上の理由から、教室の内容決定の際、われわれの日常的業務の中から、特別無理することなく実施可能なテーマを選出することが、理想的であり、非常に内容の豊かなものになると評価することができると考えている。

追記　本教室の実施にあたり、調査の段階から地元象潟町教育委員会および、公民館の方々から多大のご協力をうけましたことに、心から感謝申し上げます。

註1）鎌田重光　1976年、及び教育普及担当1980「秋田県立博物館研究報告」

註2）「秋田県立博物館研究報告」1980、教育普及担当。

註3）「秋田県立博物館設立構想」1972、秋田県